

大いなるナシヨナリリスト 福澤諭吉の声よ響け

拓殖大学顧問・松下政経塾理事

渡辺利夫



本稿は、令和五年四月二十二日に開催された松下政経塾・産経新聞社共催の公開講座「ネクストリーダーズセミナー」第一回での基調講演をもとにしています。

福澤の真実を追う

幕末の三十三年を生き、明治維新後の三十三年を生きて、六十六歳で死去した一人の大いなるナシヨナリストが福澤諭吉です。後で申し上げ

る福澤の「文明論之概略」の緒言まへごころには、自分は「一身いっしんにして二生にせいを経かる」、つまり身は一つでありながら幕末と維新後の二度の生涯を送った人間だと書いております。変動極まりない社会をじいに見据え、鋭い観察眼と卓抜な筆力をもって論説を書くことに人生をかけた人物です。その後に生まれた多くの知識人、現代の言説人を含めても、福澤ほどの迫力をもって時代と社会と人生を論じた人はいないのではないかと。私には

そう思われます。

福澤諭吉といえ、文明開化論者、欧化主義者、啓蒙主義者としてイメージされています。福澤諭吉と聞けば、幕末・明治維新时期に西洋文明を取り入れ、新生日本の建設に精出すべし、そのように説いた文明開化論者、欧化主義者としてのイメージが一般的だと思われまふ。

福澤諭吉は「天は人の上に人を造らず、人の下に人を造らず」、そう語った天賦人權説の人です。また社

会契約説の思想家でもあります。彼の言葉によりますと、「政府は国民の名代にて国民の思うところに従い事を為すものなり」、つまり、国民は税金を政府に払い、政府はこれをもって国民の財産と生命を守る。国民と政府の間にはそういう契約が成り立っている。この契約を守らないような政府であれば転覆してもよい。これはフランス革命の思想ですが、日本でそういう言説をなした啓蒙思想家が福澤諭吉だと理解されています。福澤諭吉の名を世に知らしめた明治初期の一大ベストセラーが『学問のすすめ』ですが、この本の中には確かにそのようなことが書かれております。

わたなべ・としお 昭和十四年生まれ。
三十八年、慶応義塾大学卒業。東京工業大
学名誉教授、拓殖大学学長、総長を歴任。
日本李登輝友の会会長も務める。

それからもう一つ、世に広く福澤像を決定づけているのが、福澤が晩年に著した『福翁自伝』に記された「門閥制度は親の敵でござる」という強烈なメッセージです。この本には、無類の学問好きだった父・百助が、「中津藩（今の大分県中津市を含む周辺地域）では、漢籍において百助にかなう人物はいない」といわれるほどのレベルに達していたのですが、下級武士であったがために、学問を通じての身分上昇は叶わず、失意の生涯を送ったということなどが書かれています。こんなふうにあります。

父の生涯、四十五年のその間、封建制度に束縛せられて何事も出来ず、空しく不平を呑んで世を去りたるこそ遺憾なれ。又初生児の行末を謀り、之を坊主にしても名を成さしめんとまでに決心したるその心中の

苦しき、その愛情の深さ、私は毎度この事を思出し、封建の門閥制度を憤ると共に、亡父の心事を察して独り泣くことがあります。私の為めに門閥制度は親の敵で御座る

福澤は「門閥制度は親の敵でござる」という旧社会への不満を抑えられず、親の敵を討つために西洋の学問の修練に努めるより他なしと意を決し、長崎に出て蘭学を学び、次いで大坂に行つて緒方洪庵の下で才能を見いだされ、さらに上京して蘭学から英学に転じ、知識人としての道を歩み始めたのです。福澤が、明治日本の文明化を大いに推奨し、日本の近代化のための思想形成に貢献した偉大なる知識人として捉えられているのは、彼のそうしたイメージのゆえであります。

私は学生時代から現在に至るまで、折に触れて福澤の著作に親しん

できました。しかし、文明開化論者、欧化主義者、啓蒙思想家といった福澤に対する世間のイメージは、彼の思想の一面を表したものに過ぎないことを、読むたびに悟らされました。

私は第二次大戦前の昭和十四年に生まれ、現在は八十四歳です。青春時代には安保闘争や全共闘運動に囲まれていました。そういう経験を通じて私は戦後の日本が、少なくとも冷戦崩壊までの日本は左翼リベリズムの非常に強い特殊な時代の中にあつたことを皮膚感覚で知っています。そして世に一般的な福澤像もまた、実はその左翼リベリズムの時代において「造作」された非常に偏つた福澤像なのだと考えております。近代思想史、福澤研究などをやっている人々は、みずからの思想の淵源を福澤論吉という一大権威に求めたいという願望を潜ませており、

そうした左翼知識人の願望が偏りをもつた福澤像を生み出したのだとも思われます。今日は、真の福澤論吉像を復権させたいという「野心」をもってここに臨んでいます。

福澤の思想は、戦後に作られたイメージよりはるかに多面的、多層的であり、はるかに懐の深い思想です。福澤が残した文章に触れながら、戦後に作られた既製品ではない真実の福澤像に迫ってみたい、そして社会のリーダーたるもの、こういう思想と見識をもって世に臨む態度が必要だということを訴えたい、そう考えています。

志を高く掲げよ

ここで世に一般的な福澤像との対極を鮮やかに浮かび上がらせている二つの論説を取り上げてみます。論説の一つが、明治二十四年に脱稿された「瘦我慢之説」です。福澤はこ

の論説の中で、徳川時代において高位の幕臣であつたにもかかわらず、明治新政府で再び要職に就いて権勢を振るつた二人の人物、榎本武揚と勝海舟の出処進退を、「士は二君に仕えず」という旧社会の道義道德をもって徹底的に論難しております。

榎本武揚は徳川の幕臣です。オランダ留学を経て幕府の海軍副総裁、明治維新に際しては函館の五稜郭に立てこもつて官軍に抵抗したものの逮捕、拘束、江戸に護送され禁固刑に服しました。しかし、後に許されて明治新政府に入り、トントン拍子で出世します。そして最後には外務大臣、通信大臣、文部大臣、枢密顧問官に就任するというまことに煌びやかな政治人生を送つた人物が榎本です。

勝海舟ですが、もちろん徳川の幕臣です。蘭学に秀で、軍艦奉行を務め、西郷隆盛との江戸城無血開城の

合議を成し遂げた人物として有名ですよね。ファンも相当に多いのではないかと思います。しかし維新後は明治新政府に出仕、海軍大臣、元老院議員、枢密顧問官などやはり位人臣を極めた人物です。

つまり、いずれも徳川幕府の要職にあった人物が、徳川幕府を倒した薩長を中心とする、かつては敵であった新政府に仕えて位人臣を極めた、「士は二君に仕えず」という徳義を忘れた人生を選択した人物だとして、福澤の憤懣には大いなるものがあつたのです。

さまざまな文献を調べてみますと、福澤が榎本武揚糾弾の「瘦我慢之説」を書くきっかけとなつたのは、おおむね次のような事情があつたからだと思われまふ。明治維新後、徳川藩は静岡の駿府城に移封され、その石高は八百万石から七十万石に減封させられました。福澤は、

明治維新を経て静岡に移封された徳川藩の様子が気になり、明治二十四年の秋に東海道を下つて現地へと出向いたのです。そして、途次、清水港に近い興津の清見寺に建立されたと聞く「咸臨丸殉難諸氏記念碑」を訪れ、その死者を弔うことになつたのです。

咸臨丸というのは、日米通商条約調印のために渡米する政府使節団を乗せたポーハタン号という艦船の護衛艦のことです。福澤はあるきっかけからこの咸臨丸に乗せてもらうことになり、初めて洋行することになりました。ちなみに、咸臨丸の船長が勝海舟でした。二人は同じ船に乗っていたのです。

この咸臨丸、明治維新の後は幕府の運搬船として使われ、そして清水港に停泊中、倒幕軍つまり官軍の攻撃を受けて乗員が全員死亡。しかし、倒幕軍の目をはばかって死体は

放置されたままでした。みかねた清水の侠客・次郎長、山本長五郎が手下を使って死体を下船させ、興津の清見寺に葬つてやり、その後、有志の手によつて「咸臨丸殉難諸氏記念碑」という石碑が建てられた、というのです。

福澤はこの石碑の前で線香をあげ、その後、石碑の後ろに回つて、そこに彫られている榎本の文章をみて驚愕します。そこには「従二位榎本武揚」の名前で、「食人之食者死人之事」と記されてあつたのです。従二位というのは伯爵、大変に高位の爵位ですよ。この爵位をもつ榎本が「人の食を食む者は人の事に死す」とは一体どういうわけか。この碑文の意味は、徳川家の幕臣として仕え禄を食んだ者は徳川家の事に死すべきだ、ということですよ。こんなことを榎本が書いていいのかと福澤は憤怒します。

榎本は五稜郭で蝦夷地政府を樹立したのですが、官軍による猛攻を受けて降伏、結局は敗退します。しかし、先ほども言いましたように、その後は新政府に出仕してそこで大出世したのです。函館で榎本に従い、官軍への投降を拒否して惨たる戦死を遂げた多数の部下をそのままに、自身は明治新政府で大いなる重用を受けて名声をほしいままにしている、そんな者が石碑にこのようなことを刻みつけていいはずはないと、福澤は怒り心頭だったのです。

成ればその榮譽を専らにし敗すればその苦難に当るとの主義を明にするは、士流社会の風教上に大切なことなるべし。即ち是れ我輩が榎本氏の出処に就き所望の一点にして、独り氏の一身の爲めのみならず、国家百年の謀に於て士風消長の爲めに軽々看過すべからざる所のものなり

「勝利すれば榮譽をほしいままにし、敗北すればその苦難に甘んじるといふ考えを明瞭に打ち出すことは、士族社会の風習においてきわめて大切なことである。つまりこのところ、私（福澤）が榎本氏の出処について望むところの一点だと考える理由であり、ひとり榎本氏のためというばかりではなく、国家百年の計略における士風の栄枯盛衰のため決して見捨てておいていいわけがない」

一般的なイメージからすると、福澤がこんなことをいうのかしらと思わせるような一文です。二君に仕えていずれにおいても大出世した榎本が、自分のことは棚に上げてこういうことを公然と石碑に刻んだのはどういうわけか。こういう武士の徳義への違背はとうてい許し難いというわけです。「門閥制度は親の敵でござる」といった同一の人物の言とは思えないほどです。

福澤は返す刀で、同じく元幕臣でありながら明治新政府で栄達を極めた勝海舟を切りつけて、激烈な非難の言葉を投げかけます。勝海舟批判の論点は榎本への批判とまったく同じです。

爰に遺憾なるは、我日本国に於て今を去ること廿余年、王政維新の事起りて、その際不幸にもこの大切

なる瘠我慢の一大主義を害したることあり。即ち徳川家の末路に、家臣の一部分が早く大事の去るを悟り、敵に向て曾て抵抗を試みず、只管和を講じて自から家を解きたるは、日本の経済に於て一時の利益を成したりと雖も、數百年養ひ得たる我日本武士の氣風を傷うたるの不利は決して少々ならず

「実に遺憾なことだが、わが日本において今を去ること二十余年前、王政復古の明治維新が起り、これに際して不幸にも貴重なる瘠我慢という一大主義を損なうべきことがあった。すなわち徳川家の末路に、家臣団の一部が少しでもはやく大事が去るべきだと考え、敵に対してついで抵抗することなく、ひたすら講和を策してみずから進んで徳川家を解体してしまつたということがあつた。このことは日本の経済に一時的

な利益をもたらしただとはいへ、數百年にわたり養われてきたわが日本武士の氣質を損なつたという不利においてまことに大きなものがあつた、といわねばならない」

士風、士魂の人よ

対照的に、福澤の西郷隆盛についての筆致には、偉大なる人間、政治家を仰ぎみるような敬意にあふれたものがあります。福澤は明治十年に「丁丑公論」を書きます。時のジャーナリズムでは、明治新政府に反旗を翻した西郷隆盛を逆賊として批難する記事、論説がほとんどでした。福澤は、そんなジャーナリズムは、西郷の士風を軽んじて抵抗の精神を衰退させる文明の虚説であると断じます。丁丑というのは明治十年のことです。

福澤論吉と西郷隆盛との關係についてお話ししてもいいのですが、ち

よつと話が横道に入つてしまひそうですので、ここでは次の文章を読むことによつて福澤の西郷に対する欣慕の情、哀惜の氣持ちをお伝えしておくにとどめます。

西郷は少年の時より幾多の艱難を嘗めたる者なり。學識に乏しと雖ども老練の術あり、武人なりと雖ども風彩あり、訥朴なりと雖ども粗野ならず、平生の言行温和なるのみならず、如何なる大事變に際するもその挙動綽々然として余裕あるは、人の普く知る所ならずや。薩の士人は古來質朴率直を旨とし、徳川の太平二百五十余年の久しきも遂に天下一般の弊風に流れず、その精神に一種貴重元素を有する者と云うべし。薩に居る者は依然たる薩人にして、西郷、桐野の地位に在るものにも衣食住居の素朴なること毫も旧時に異ならず

「西郷は少年の時代から幾多の非常な困難を経験してきた人物である。多くの試練に耐えながら身につけた政治術をもち、武人ではあるものの風彩があり、朴訥であるものの粗野ではなく、平生の言行は温和であるばかりか、いかなる大事に臨んでもその挙動は余裕綽々としていることは多くの人々に広く知られるところである。薩摩の士族は昔から質朴かつ率直であることを主意としており、徳川太平の二百五十年以上にわたり世間一般の悪い風俗や習慣に流されることなく、その精神においてはある種の貴重な根源的要素をもっているというべきである。薩摩に居住する人々はいまなお薩摩人であり、西郷隆盛や桐野利秋のような高い地位にある者でも衣食住が素朴であることは現代も昔と変わるところがない」

立国の道は

ナシヨナリズムである

文明開化論者、欧化主義者のイメーヂの強い福澤が、その対極にある旧士族の道徳の大切さを、とことんこのように説いていた事実を知っている方はそう多くはないと思われまゝ。

福澤論吉といえ、**「国権」**よりも**「民権」**の大切さを説いた自由民権論者とみなされがちです。事実、そのように記している解説書が今でもあります。しかし、国会開設や普通選挙の実現などを求める自由民権運動が大きな政治的潮流となっていた明治十四年に書かれた論説**「時事小言」**を読んでみますと、福澤が次のように述べていたことを知って驚かされます。ここは現代語訳のみで申し上げます。

「もちろん私（福澤）は民権論に

反対ではないが、民権はただ伸張すればよいというものではない。国会を開設し、どのような国柄の国家を建設すべきかという肝心の問題を議論するのでなければ、民権など論じても詮無きことだ。西洋列強による干渉や介入が恒常化している今、ただ国会を開設すればよいというほど事態は単純ではない」

もつとはつきりと自分（福澤）はもともとは民権主義者だが、目下の自分は国権主義者だといって、次のような巧まざる比喩でことを論じています。

俚話に、青螺が殻中に収縮して愉快安堵なりと思ひ、その安心の最中に忽ち殻外の喧嘩異常なるを聞き、窺に頭を伸ばして四方を窺えば、豈計らんや身は既にその殻と共に魚市の俎上に在りと云うことあり。国

は人民の殻なり。その維持保護を忘却して可ならんや。近時の文明、世界の喧嘩、誠に異常なり。或は青螺の禍なきを期すべからず。この禍の憂うべきもの多くして之を憂る人の少なきは、記者に於て再び不平なきを得ざるなり

「青螺が殻の中に収まって愉快だ安堵だと思つているその最中に急に殻の外から喧嘩のような異様な騒ぎの聲が聞こえてきて、こっそり頭を外に伸ばして四方をうかがえば、何とまったく思いもかけないことに、自分の身は殻と一緒に魚市場のまいたのうえに乗つかつてゐるではないか。そんなたとえ話がある。国は人民の殻であり、国民の維持と保護のことを忘却してなお国家だといえようか。最近の文明のありよう、世界の戦争などを観察していると、まことに異常なことが起こつてゐるといわざる

を得ない。憂うべき禍は実に多い一方、禍を憂える人が少ないことは、私にとつては大変な不満である」

国家とは生身の青螺の殻のようなものであり、殻が外敵に壊されてしまえば、そもそも国民の生命や財産の守護などできない。厳しい国際情勢の中で、その現実を直視することなく民権と国会開設について騒いでいるだけでは、国家の存立自体が危うい。青螺の比喻を用いてそう福澤は警鐘を鳴らしているのです。

現在の日本も、中国の海洋進出や近づく台湾有事、北朝鮮の核開発などさまざまな難題に直面しています。国会やメディアではそれほど重要とは思えない問題に延々と時間と紙面を費やしています。日本にとつて一番大事なことは何なのか。今何をしなければならぬのか。特に組織や人の上に立つリーダーには事の

軽重を見極めるリアルな見識が不可欠だと思うのですが、福澤から学ぶべきはこのことではないでしょうか。福澤の最高傑作はなにかと問われますと、明治八年に出版された『文明論之概略』を挙げる方は多いのですが、私もそう思います。議論の密度と説得力、文章の格調の高さからしてまったく異論はありません。実際、同書は福澤が最も知力旺盛な時期に、その力の限りを尽くして書き上げた大作です。

とはいえ、『文明論之概略』で福澤が伝えたかった結論を知っている方はそう多くはないのではないのでしょうか。ほとんどの方が『文明論之概略』は、日本の文明開化の必要性を正々堂々と論じた傑作だという広く流布されているイメージを共有しているのではないのでしょうか。しかし、それも福澤の文章そのものにあたりながらよく検討して見る必要が

あります。「文明論之概略」はその結論部に至り、一番重要なことは何か問うて、次のように論理を展開しています。

目的を定めて文明に進むの一事あるのみ。その目的とは何ぞや。内外の区別を明にして我本国の独立を保つことなり。而してこの独立を保つのは文明の外に求むべからず。今の日本人を文明に進むはこの国の独立を保たんがためのみ。故に、国の独立は目的なり、国民の文明はこの目的に達するの術なり

「目的を定め文明化の方向に向かって進むより他に日本の前途はない。その目的とはいったい何か。内外の区別を明らかにしてわが日本国の独立を確保することである。しかし、日本国の独立を保つための方法が文明以外にあると考えるはならな

い。現代の日本人が文明の方向に歩みを進めるのは、日本の独立を確保するだけのためである。それゆえ、国の独立こそが目的であり、国民の文明はこの目的を達成するための方法なのである」

福澤はなぜ日本が文明化する必要があるのかと問えば、それは自国の独立を保つためである。文明は独立を維持するための「術」に過ぎないと結論づけているのです。日本の目下の最大の課題は独立であって、独立のための手段として文明を捉えるべきである。思考の順序を取り違えては絶対にならない、というのが福澤思想の核心だといえます。「文明論之概略」というより「独立論之概略」が福澤の真意であったと私には思われるのです。

現在の日本は、平成不況に嵌まり込んで以降、長期低迷から脱する見

込みがなお立たず、少子高齢化の急速な進行により、経済社会の全体が衰亡化の様相を呈しています。国際社会においても自国防衛を他国に依存しながらぬくぬくと生きてきたために、国際秩序が大きく変わろうとしている中で、日本は右往左往せざるを得ない状況に立ち至っています。

パシフィズムの超克へ

わが日本、遠い過去に採用された理想主義的な、というより空想主義的な憲法と憲法解釈に身を委ねてきました。そうして自国の防衛に己の身を削ることの少なかつたのがわが日本であります。

ロシアの残忍なウクライナ侵攻がなお続いています。中国では台湾併合への野望がにわかには強まっています。北朝鮮の核もついに実戦化の段階に入らんとしています。

いかにも遅い判断ではありません

が、昨年末、国家安全保障戦略に関する防衛三文書が閣議決定の運びとなりました。ようやくにして、であります。日本もパシフィズム（反戦平和主義）、つまり軍事力を嫌悪し、外交に過剰な期待を寄せるパシフィズムから脱しようという姿勢をみせるようになったのです。

新戦略は、現在の日本が戦後最も厳しく複雑な安全保障環境の只中にあるという認識に立っています。それゆえ力強い外交を展開しなければならぬが、同時に「自分の国は自分で守り抜ける防衛力を持つことは、そのような外交の地歩を固める」ものになると訴えております。大いに評価したのであります。しかし、この戦略を実現するのに必要な基本的原則には、平和国家として「専守防衛に徹し、他国に脅威を与えないような軍事大国とはならず、非核三原則を堅持する」と旧来のもの

のが踏襲されているではありませんか。「自分の国は自分で守り抜ける防衛力を持つ」とはつきり記述する一方、他方では専守防衛と非核三原則を堅持すると同一文書の中で述べるのは自己矛盾ではないでしょうか。「他国に脅威を与えるような軍事大国とはならず」というのは、平和と安全法制成立時の議論の中で何度

も繰り返されてきた「必要最小限度」規定と同一のものだと思われます。これで強大化をつづける中国の軍事力に対抗できるのでしようか。三文書の作成者もそのことを承知していません。超えると憲法論議にまで踏み込まざるを得ない。それゆえ、旧来のフレーズにとどまらざるを得なかったのだと想像されます。核抑止戦略の方は非核三原則をうたうことによつて封印されてしまったかの感さえあります。

日本の武力攻撃に対しては「反撃能力」の整備によって対応すると明記されたことは評価されるべきですが、専守防衛、非核三原則、必要最小限度によつて確かな反撃能力が担保できるのでしようか。憲法制約をいかに乗り越えるか、まだ難題が山積しているように思われます。

それも戦後の日本人から、福澤が説いた、自分の国や地域は自分で守るといふナショナリズムがなお欠如しているからなのではないでしょうか。戦後七十数年の間、日本は国際社会の中で、独立自尊の精神をすっかり忘れたまま生きてきたかのようです。このままでは日本の独立はやがて危殆に瀕するに違いありません。激動の幕末・明治期に苦渋に満ちた思考を強いられた大いなるナショナリスト福澤諭吉の声に、最も深く耳を傾けるべきは現代の日本人なのであるかと私には思われるのです。